

テーブルセンター

ウイルタ

サハリン

直径25.0cm

チベットの人と文化

会場：当館特別展示室

平成10年度の企画展は「チベットの人と文化」をテーマに、現代チベットの文化を紹介しました。チベット文化を紹介することには大きく二つの意味があったと考えています。一つは日本であり知られていない文化を紹介すること、もう一つは北方諸民族と共通する“寒冷”な環境における文化的適応を比較してみることができるという点です。「チベット」という名称はよく知られていますが、チベット文化の在り方はこれまで紹介される機会が多くありませんでした。その主な要因は、かつてのチベットが強力な鎖国政策をとっていたことと、1951年の中国によるチベット侵攻後、中国に編入され、近代以降ごく最近まで外国人の入国・入域が事実上禁止されてきたことによります。

環境に対する適応を考える際に重要なのは、チベット地域は寒冷であるうえに、標高4000m前後の高原地帯であるため、空気が希薄で気圧が低い点です。人や動物は十分な酸素を摂取するのに多くの空気を呼吸しなければならず、身体的に負担を受けます。また水の沸点が低くなるため、調理なども標高の低い地域と同様にはできなくなります。さらに、乾燥という条件が加わります。インド洋から湿気をもたらす夏季のモンスーン（季節風）は、ヒマラヤ山脈に達するまでにその大部分の水分を雨や雪として放出します。そのため、ヒマラヤ山脈を越えると乾いた風となり、チベット高原にはわずかの雪や雨しかもたらさず、植物の生育に大きな影響を与えています。

このような厳しい環境のなかで、チベットの人びとは7世紀半ばに成立した統一王国「吐蕃^{トバン}」以来、仏教を政治や社会の求心力とし、農耕、牧畜や交

易を行ない、周辺の諸国からさまざまな文化を取り入れながら、独自の文化を形成してきました。

■展示資料

本企画展は、北海道大学大学院教授・大泰司紀之氏の協力で実現しました。これまで日本におけるチベット学の蓄積は主としてチベット仏教に関するもので、民族学あるいは文化人類学などの分野では現地調査を行うことができませんでした。けれども近年、中国政府は開放政策を打ち出し、1985年以降しだいに外国人のチベットへの入域が緩和され、最初に報道関係者や研究者が受け入れられるようになりました。大泰司教授は、1986年以降19次にわたりチベット地域で野生動物および牧畜文化の調査をされてきました。その間に多くの民族資料を収集され、さらにチベットの自然や文化についても数多くの写真を記録されてきました。本企画展ではそれらの民族資料および写真資料を活用させていただきました。



展示室の様子

■展示の構成と主な展示資料

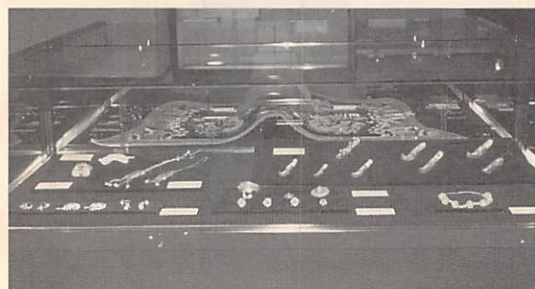
展示された民族資料は衣類、装身具、牧畜具、食器・調理具、仏具など113点です。最初のコーナーは衣類や装身具およびその他の身につけるもので構成し、女性用の晴着や普段着、牧畜民のブーツや帽子、男性用ナイフ、嗅ぎタバコ入れのほか、指輪やイヤリング、頭飾り、ネックレス、ナイフ、針入れなどを展示しました。色鮮やかな玉で装飾されている女性の装身具類は、財産を装身具として身につける牧畜民の生活観があらわれています。第2のコーナーではヤクやヒツジの牧畜に関する資料を展示し、牧畜のための馬具やヤクの鼻輪、荷駄鞍、カウベル、ヤクを追うための





投石具などで構成しました。第3のコーナーでは、碗や杓子、匙などの食器類、ヨーグルトづくりの容器や酒容器、バター茶をつくる器などのほか、日常の食事に欠かせないオオムギから作られるツァンパ（麦こがし）、磚茶、チーズといった食品や嗜好品の実物も展示しました。最後のコーナーではチベット仏教に関わる資料を展示し、魔尼車、仏画や小型の仏像など家庭の祭壇に置かれるもの以外に、遊牧民が夏の終わりに集まって祭を行う際に利用される祭用テントや行李として用いられるブリキ製のトランクを展示しました。

写真資料の展示では、農村の生活、牧畜民の生活、都市の生活およびチベットの野生動物に関する70枚のカラー写真により、現代のいきいきとした人びとの生活や文化、またこれまでほとんど調査が行なわれなかったチベット固有種のクチジロジカをはじめチベットノロバ、チベットガゼル、ジャコウジカ、オオヤマネコなどチベットの野生動物を紹介しました。写真で紹介された地域は主にチベット自治区のラサ、林周・那曲地域、日喀則周辺、四川省甘孜州の康定県、甘孜県、石渠県、道孚県、青海省果洛州瑪多県、玉樹県です（地図参照）。



女性の装身具類

■展示にあらわされた環境適応

チベットの人の乾燥・高所・寒冷への適応は、農耕と牧畜あるいは食事の習慣に典型的にあら

わられています。牧畜は、ヤクやヒツジなど、これらの環境に適応した動物を家畜とすることで成り立ってきました。とりわけヤクはチベットの牧畜民の衣食住、移動手段のすべてにわたって利用され、肉は干し肉（塊のままで天日で干したり、薄くスライスして家の中などで乾かす）として生のままで食べられています。乳はバターやチーズ、あるいはヨーグルトとして加工され自家用や商品となっています。保温性にすぐれた毛は牧畜民のテント地やさまざまな織物の原料として使われています。また、頑健なヤクは荷駄獸や乗用としてもよく利用されてきました。ヤクの蹄は堅牢で、高山険路、雪道や沼沢、急流の渡渉も難くこなす能力をもつため、「高原の船」とも呼ばれ、チベットには欠かせない家畜です。また高冷地品種のオオムギ製のツァンパは、ヤクやヒツジの肉とともにチベットの主食となっています。茶碗にこのツァンパとチーズを入れ、バター茶を注いで練り団子状にして食べます。バター茶は磚茶という塊になった中国産やインド産の紅茶を煮出し、バターと塩を加えてバター茶づくり容器で混ぜ合わせたものです。チベット高原では空気が希薄かつ乾燥していることにより、呼吸するたびに体内の水分が奪われて、大変よく喉が乾くため、人びとは水分補給としてバター茶を日に何杯も飲みます。

来場者の皆さんは、本企画展をつうじて厳しい環境のなかでつくりあげられてきた人びとの知恵や、仏教を身近なものとするチベット文化への理解を深められたのではないのでしょうか。熱心に展示に見入る来場者の方も多く、チベットに対する関心の高さを改めて認識しました。

多くの情報と展示資料をご提供いただいた大泰司紀之氏に感謝申し上げます。

(学芸課 渡部 裕)

チベットの人と文化

平成11年2月27日(土) 13:30-16:00 当館講堂

企画展「チベットの人と文化」に関連して講座を開催しました。以下にその概要を報告します。

■「ヤクとチベット文化—生活戦略の地域性と文化的シンボル—」月原敏博氏（大阪市立大学）



チベットをはじめヒマラヤ山脈一帯の自然環境はそれぞれの地域の標高や降水量によって多様性がある。ヒマラヤ山脈南からブータンを通してチベットへ入国した時に、標高が高くなるにつれ寒冷化する立体的な気候分布を体験した。また山脈の南側はモンスーンの影響を受けるため雨季と乾季がみられるが、北側は年中乾燥した気候であることが対照的である。そしてチベット系の人びとは国境を越えて山脈の南北両側に居住している。

ヒマラヤ山脈南側の標高が低い地域ではイネを栽培し、ウシも飼育する。標高が高くなるにつれ栽培作物はオオムギなど寒冷地に適したものへ、家畜はヤクのほかにヤクとウシの雑種が多くなるという変化が見られ、農耕よりも牧畜に重点が移ってくる。ヤクは暑さに弱いが寒さに強く、力が強くて丈夫な、山岳地帯に適した荷駄獣である。さらに高地になると、ヤクの放牧を主体的に行う人びとがいる。ヤク放牧民は樹木限界のあたりに村を構え、ヤクの毛でできたテントで移動生活をする。ヤクの毛はテントのほか衣服に、皮は靴に、乳はバターやチーズに、その糞は燃料にとさまざまに利用されて無駄がない。山脈を越えて北のチベット側では乾燥した寒冷な気候のため、オオムギ栽培とヤク飼育が中心で、ヤクは生活に欠かせないものである。つまりこの地域に住むチベット系の人びとには、住んでいる環境の違いから生活に多少の違いはあるけれども、基本的にヤクを飼育して利用するという統一性がある。

■「チベットの自然と文化」

大泰司紀之氏（北海道大学大学院）

チベット仏教に代表されるチベット文化は、中国の儒教とインドのヒンズー教、仏教そしてイスラム教の影響を受けて生まれたものである。この地域の気候は乾燥している上に寒冷で居住するには厳しい環境であるが、それを支えているのが人びとのチベット仏教に対する篤い信仰心である。

チベットの人びとは主にオオムギ栽培とヤク・ヒツジの飼育を組み合わせで行っている。オオムギは炒って碾いたツァンパ（麦こがし）にして、ヤクの乳からつくったバターを入れたバター茶で練り、チーズも加えて、ヤクの肉とともに主食となる。牧畜民は石で囲った土台とヤクの毛で織った布を組み合わせたテントに住むが、農耕民や町で暮らす人びとは石や土で造った家に住む。樹木の生育するところでは木造の家も造られる。家の中にはたくさんの仏画が飾られている。

首都のラサには巡礼のために多くの人々が集まり、市場（バザール）が開かれる。バザールではバターやツァンパをはじめ、漢方薬の冬虫夏草などさまざまなものが売られている。また標高5000m以上の地域ではヤク放牧は行われなため、野生動物が生息していて、クチジロジカなどこの地域だけに分布する動物も多い。



* * *

当日は2人の先生方が現地でも撮影された多数のスライドを交えながら講演していただきました。チベット地域の野生動物のほか、高山病など参加者の質問にも答えながら幅広い話題についてお話しいただきました。（学芸課 稲垣はるな）

ロビー展

「ウイルタの手仕事」

開催期間：1999年6月8日(火)ー7月7日(水)

場所：当館特別展示室 観覧料：無料

当館所蔵のウイルタの資料の中から、美しい刺繍ししゅうが施された衣服や白樺樹皮細工などを展示します。また、ウイルタの手仕事を紹介するビデオを上映します。

関連事業：

講習会「ウイルタのお人形づくり」

7月6日(火)13:30~15:30 (参加無料)

講師：北川アイ子氏

(資料館ジャッカ・ドフニ館長)

ウイルタの女の子が大事にして遊んだお人形「ホホ」を作ります。



ウイルタのお人形「ホホ」

* * *

■住所変更

当館の住所の地番変更に伴い、住所が一部変更になりました。新しい住所は以下のとおりです。

〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1

■「社会教育施設紹介写真パネル展」(仮称)

開催日：6月14日(月)・15日(火)

場 所：北海道庁1階・道民ホール

(札幌市中央区北3条西6丁目)

道立青年の家、少年自然の家など、当館を含む道立社会教育施設の紹介を行うパネル展です。ポスターの掲示やパンフレット配布等の広報を中心とした内容を予定しています。札幌市の中心部で開催しますので、お近くにお越しの際はぜひご来場下さい。観覧は無料です。

今号の表紙ーテーブルセンターー

この資料は戦前に日本領だった樺太(サハリン)のオタスで収集された。オタスは敷香シシマ(現ポロナイスク)郊外にあったアイヌ以外の少数民族の居留地である。皿敷きとも呼ばれたテーブルセンターはウイルタが日常生活で使っていたものではなく、樺太(サハリン)に来る日本人観光客へのみやげ品としてつくられていた。トナカイのなめし皮シシウに絹糸を用いて文様が刺繍されている。ウイルタ語で「イルガ」と呼ばれる文様はもともと衣服や靴などの実用品につけられてきた。曲線を多用する同様な文様はウイルタのほか、北海道やサハリン、アムール川流域の諸民族に広く見られる。ベージュ色のトナカイ皮に茶色と薄茶色で太い曲線を刺繍し、だいだい橙色・黄色・灰色などさまざまな色で縁取っている。

みんぞく こうこ はくぶつかん
in 北海道

このコーナーでは当館の活動に関連する分野の新聞記事のうち、道外ではあまり紹介されていない情報を掲載します。

- 2/1 羽根の衣服など貴重資料ずらり：独から「里帰り」したアイヌ工芸品展、白老町/D
- 2/6 北方民族アイヌイトの雪の家イグルー作り：冬の体験教室で小学生が挑戦、美瑛町/D
- 2/11 先住民族と政府が対話する環境を：札幌でアイヌ民族シンポジウムを開催、世界の先住民の権利を考える/D
- 2/14 丸木舟で宗谷海峡横断へ：苫小牧の郷土史家・梅木さんらがアイヌの「チブ」を復元、6月下旬に挑戦へ/Y
- 3/5 戦前のサハリン伝える：先住民族の生活など撮影した故・半沢中氏の写真展、斜里町知床博物館/Y
- 3/6 アイヌ舞踊、後世へ：アイヌ民族舞踊の後継者不足などの課題を討議する「普及啓発講演会」を開催、釧路市/D
- 3/6 アイヌ民族女性の伝統の業を世界へ：米国・スミソニアン博物館のアイヌ特別展で伝統の編物や刺繍ししゅうを実演/D(夕)
- 3/23 アイヌ民族伝統の狼体験：約30人がシカ追い込み猟と解体・霊送りにも参加した2泊3日の「シカ狩りキャンプ」、阿寒町/AS
- 3/27 二風谷ダム訴訟の記録、萱野茂さんらが自費出版：裁判が認めたアイヌ民族の「先住性」/AS
- 3/30 アイヌ民族のサケ皮靴「ケリ」作り：博物館で体験講座開催、美幌町/Y

*AS：朝日新聞、D：北海道新聞、M：毎日新聞、Y：読売新聞
複数紙掲載の場合は扱いの大きい方を紹介しています。

■執筆著・出版社から贈呈を受けた書籍等

- ・加藤敬1995『ミャンマー憧憬 祈りの篤き人々の素顔』平河出版社
- ・加藤敬1990『タンキー 台湾のシャーマニズム』平河出版社
- ・加藤敬1994『聖なる響 西チベット少数民族の祈り』平河出版社
- ・加藤敬1990『万神 韓国のシャーマニズム』平河出版社
- ・東北学院大学史学科編1998『歴史のなかの東北—日本の東北・アジアの東北』河出書房新社
- ・韓国国立中央博物館1998『驪州淵陽里遺跡』
- ・韓国国立中央博物館1998『東萊樂民洞貝塚』
- ・З.П.Соколова 1998 *Животные в Религиях*, Издательство (Пань)
- ・NHKソフトウェア1999『司馬遼太郎 街道をゆく10 オホーツク街道』(ビデオ)
- ・オキfeaturing安東ウメ子1999『ハンカプイ』(CD)

■主な来館者

- 1/30 神田外語大学 菅野裕臣氏
- 2/11 フィンランド大使館
ヤリ・スィンカリ2等書記官
- 2/17 タイ・タマサート大学
C.Prachuabmoh教授
- 2/20 アラスカ大学フェアバンクス校
R. Burnhardt教授
北海道教育大学釧路校
高嶋幸男教授
玉川康之助教授
- 2/21 早稲田大学 寒川恒雄教授
北海道教育大学釧路校
園山和夫教授
- 3/17 イスラエル・ヘブライ大学
M. Ben-Sasson学長
H. D. Rabinowitch農学部長

■その他の行事報告

- 2/13 (土) 博物館クラブ
「北方民族の狩猟法
—ワナの仕組みを学ぼう—」

■観覧者動向 (1～3月)

			(名)	
		常設展示	企画展	
1	月	624	—	
2	月	2,307	1,819	
3	月	1,555	859	
計		4,486	2,678	

■平成11年度の主な行事

- 6/8(火)～7/7(水)
ロビー展「ウイльтаの手仕事」
 - 7/6(火) 講習会
「ウイльтаのお人形づくり」
 - 7/20(火・祝)～9/26(日)
第14回特別展
「神の魚・サケ—北方民族と日本—」
 - 9/4(土)講演会「サケをめぐる文化」
 - 9/12(日)～
連続講座・北方文化セミナー
「魚と暮らして—アイヌとその周辺民族の漁撈文化—」
 - 10/28(木)・29(金)
第14回北方民族文化シンポジウム
「北方諸民族のなかのアイヌ文化—生業をめぐる—」
 - 2/1(火)～3/20(月・祝)
企画展「北の海と川のめぐみ
—縄文文化からアイヌ文化まで—」
 - 2/12(土)
講習会「鹿笛の歴史とはたらき」
 - 2/19(土)講座「北の海と川のめぐみ」
- * * *
- このほか講座・講習会・博物館クラブ・季節の催し等多数予定しています。詳しくは行事案内パンフレットをご覧ください。

■行事案内 (5～7月)

- 5/5(水・祝) こども映写室
- 5/23(日)講習会
「北方民族の有用植物観察会」
- 6/8(火)～7/7(水)
ロビー展「ウイльтаの手仕事」
- 6/11(金)・13(日)
講習会「とんぼ玉づくり」
- 6/12(土)博物館クラブ
「とんぼ玉づくり」
- 7/6(火)講習会
「ウイльтаのお人形づくり」

■出版物閲覧コーナーを設置

情報普及室内に今まで当館から出版された図録や紀要、報告書などを閲覧できるコーナーを設けました。当館にお越しの際はぜひご利用下さい。

■職員の異動

退職 (3/31付) 解説員 本間 恵
採用 (4/1付) 解説員 堤 圭子

■友の会会員募集中

北方民族博物館友の会平成11年度会員を募集中です。友の会では季刊誌「Arctic Circle」や「友の会だより」をとおして北の文化を紹介しています。年会費は3000円。すでに会員になられた方は、お知り合いにもご紹介ください。詳しくはお問い合わせを。

■編集後記

本州で桜が咲いたという便りが届いてしばらくになりますが、網走でお花見をするのはまだもう少し先のことになりそうです。今年は雪が雨に変わるのも、融けるのも例年より遅いようです。博物館近くの道路ぎわの斜面に、ふきのとうがたくさん顔を出しているのを見つけました。(稲垣)